

天使よ海に舞え 山本道子



山本道子—天使よ海に舞え

新潮社

天使^{てんし}よ海^{うみ}に舞^まえ

昭和五十六年五月十日 印刷
昭和五十六年五月十五日 発行

著者／山本^{やまもと}道子^{みちこ}

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七十一

電話／業務部・東京(〇三)二六六一五一

編集部・東京(〇三)二六六一五四一一

郵便番号／一六二

振替／東京四一八〇八

印刷所／株式会社光邦

製本所／神田加藤製本

定価一三〇〇円

(乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付)
(下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。)
© Michiko Yamamoto. Printed in Japan, 1981.

天使よ海に舞え 目次

第一章	城のない国に……………	7
-----	-------------	---

第二章	迷子の天使……………	133
-----	------------	-----

第三章	光り舞う……………	223
-----	-----------	-----

天使よ海に舞え

第一章 城のない国に

1

すれちがった自動車は、堂どうとしたカイゼル髭のおとこが運転していた。

堂どうとしているのは、ぴんと跳ねあがったカイゼル髭だけではなく、彼の胸も前景にむかつて、振り返るかぎりにふん反り返っている、といった姿勢だった。由子は、運転中のシイにそのことを告げた。あのおとこのひとはアメリカ人じゃないみたい、あんなに偉そうにふん反り返ってるなんて。シイは聞き咎めて鼻を鳴らした。

おとこの自動車は、信号が変わると、右折して、由子の視界を直角に去って行った。そして、二度とすれちがうことのないであろうその自動車が、妙なカードをちらつかせて走り去るのを流し眼で追ったのは、由子自身の眩きが、彼女の脳裡にすっかり定着してからだった。

おとこが片手運転をしながら、ひらひらさせたカードには、黒い太書きの横文字が見えた。シイは、鈍い声を発して危うく直進レーンからはみ出そうになった。自動車が唐突に横揺れするのにつられて、由子の鉢もシートベルトに軽く締めつけられた。その瞬間、まったく未知としかいえないシイについて由子は考えた。

「驚いたわ、トマス・ジェンキンじゃないの」

シイは、前方に顔をむけたまま、カイゼル髭のおとこを嗤った。その笑顔や笑い声は、どんな場合にも由子には、嗤いとしか思えないのだった。自分の笑い声が、由子に不快感をあたえることにシイは気づいていない。

シイと同質の声をした歌手が、美声ともいえる声で歌いだしたとき、由子はだしぬけに裏切られた思いになったことがある。その女性歌手は、由子の音楽大学の友人のひとりだった。シイにはじめて会ったとき、由子はその話し声から、職業歌手になった友人をすぐに想起した。時間も距離もすっかり隔絶した場所に立っているのに、まるで十分前にその友人と喋っていたような感覚で、シイという見知らぬ女に直面しているということが、由子をうろたえさせた。それもこの耳障りな声のせいであった。

「なんて書いてあったか、あんた見なかった」

トマス・ジェンキンとかいうあのおとこがひらつかせていた棒つきカードのことだ。見なかったわ、わたしにはカイゼル髭のほうがよく見えたわ、それにアメリカのおとこにしては、なかひどく威張り返ってたようだし、どこかの国の兵隊みたいじゃないの。

「ペイ・ミイって書いてあったのよ、わたしたちに気がついたのよ、彼のプラカードには下品なことばが書いてあるわ、そんなのをいくつも持っていて、運転しながらびらびらさせるの、ひとを喰ったアイリッシュだわ。あれで酒場の店員なのよ、やっと恰好がついてきたってこないだも髭を自慢してたけど、ワイフが逃げ出して悩み抜いてるうちに生えそろうたってわけ。エミイっていうワイフが、シヨベルカーのオペレーターと駆落ちしちゃったのね、トムのほうにも変なのがあるから、アイミタガイってとこね。でもこどもを二人置いて行かれちゃったから、一時は気の毒で放ってはおけなかったわ、こどもはわたしが預かったのよ。エミイは赤ん坊を連れてったわ、

知って知らん顔もできないし。わたしにもあれこれ事情があるにはあったけど、なにしろ彼は気のいいところがあるし、すっかりわたしに甘えちゃって相棒と愉しい暮らしをはじめたのよ。ゼイよ。わたしだっていつまでも保育所していられないし困っちゃった。とにかくこともたちを彼のパートナーにわたしたわ、それがまた面倒見のいいおとなのよ、まあ、その頃からあのひとの髭も立派に恰好がついてきたってわけ」

長い浮橋が光っている。トンネルのまわりに光が溜っている。由子は遠い水を眺めた。それから、たったいま視線を捉えて、たちまち彼方に飛び去った白い桜の花に声をあげた。見まちがいだろうか。眼の錯覚が枯木に花を咲かせたのだろうか。ひとの背丈ほどの茶色とも灰色ともつかない一本の樹に、ふわりとした白い点描が、曇ったワイングラスのように膨らんでいた。

あの花は、ほんとうの桜ではないだろう。もしあれが冬に咲く桜だしたら、来年もまた見ることが出来る。二、三年は続くはずのこの土地での暮しを、由子はちらつと思いやった。でもあれは狂い咲きかもしれない。もし狂った花だとしたら、来年の今ごろ咲くかどうかはわからない。それとも狂った花は、毎年狂いつづけるのか。

ダウン・タウンにむかって右側の、トンネルの出口と入口のそう広くない芝生地帯が、由子をいつまでも黙らせていた。ここを通過するたびに、わたしはいまと同じ沈黙に引きこまれることになりそうだ、と思う。その予感、遠く視線を遊ばせるまでもなく、見知らぬ空と水と、そして天までも延びている白いなめらかなフリー・ウェイのそこここに、置き忘れた石ころのように散らばっていく。

由子はシイのことばを、ほとんど聞いていないのだった。英語とちがって、ことばは耳にとびこんで来る。しかしシイの饒舌のなかには、由子がどうしてもついてゆけない部分がある。それが由子を黙らせもする。彼女ひとりに喋らせながら、このひとつのはなしはどこか可怪しいと思わ

ずにはいられない。といってもシイのはなしの内容に疑いを抱くというわけではなかった。

シイの吐き散らすことばが、音程のはずれた楽曲の合成音のように聞こえるのは、おそらくこのひとがわたしにとって未知のひとだからだ、と由子は思う。由子が黙りこむと、シイは苦しめられていた人間のように、ますますことばを吐き散らして、悪足掻きする。その脈絡の不鮮明な彼女の事情が、由子の脳裡にいっぱい詰めこまれる氣づかいはない。彼女のひとり笑いに、まれに唱和してみても、わずかばかりの輝きを見せるはなしの断片は、たちまち白茶けたあと味をのこして消えてしまう。

シイの煙幕。由子は、彼女の饒舌について考える。そしてその極点に触れることが、忍びない氣持になる。シイは、ある一点をどこまでも沈潜させている。

由子がシイに出会ったのは、日本料理店のフロントだった。アクセントに訛りのある日本語をはなすおとこが、会計カウンターの奥に立っていた。彼の日本語のぎこちなさが、由子にはめずらしかった。高志がそこへ現われるまで、彼女はそこをおとこを見ていた。

縁台には、紺紺の薄い座布団が並べてあった。日本調民芸風を誇示しているらしく、入口の小さい一隅に祠のような置石があり、その前に赤い涎掛けの地蔵が立っている。雰囲気づくりの内装として見ても、地蔵のすぐ脇に申し訳ほどの枯山水なども配してあって、とりとめがない。

店の奥には、三畳ほどの日本間が、箱のように並んでいて、幅の狭い上り框は、色ニスで光っている。紺紺に朱色の半幅帯を締めたウエイトレスたちが、動きまわっていた。いずれも日本の女たちで、どこかで一斉に仕込まれたのではないかと勘ぐりたくなるような、そっくりの歩きかたをする。一步一步、着物の裾を蹴りあげるのが粗雑としかいようがない。威勢のいいのは足

許ばかりで、上体を前かがみにして、せかせかと歩きまわる。彼女たちがアメリカの一隅で、日本料理店に勤務するようになった経緯は、わたしなどの想像におよびもつかぬものがあるのだろう、と由子は思う。中年過ぎの女もいるし、体格のいい若い女もいる。

ジーンズにブーツの乗馬スタイルの女が扉を押して入って来ると、フロントのおとこと小声ではなしはじめた。店主と見えるそのおとこは、女の眼を見据えて、頷いたり首を振ったり深く同情を示すふうであった。ひとしきりはなしこむと、その日本の女は、小座敷の並んでいる通路とダイニング・ルームを突切って、迷路のように入りくんで見える奥へ姿を消した。

ようやく現われた高志と、小部屋に落着いてからも、瞬時注がれた女の険しい視線に、由子は捉われていた。女は店主とはなし終えてから、すぐ背後に腰かけていた由子に気づいたようであった。その眼が、激んだ橙色の電光の下で、西瓜の種のようにちいさく光った。

「あんたを学生だと思ったわ、日本からの留学生はみんなあんたみたいな顔してるわ、心細そうに、日本人の集るところへ寄って来るのよ。だれかが声をかけるまで、臆病神にとっつかれたような眼で、能面みたいに無表情で白っ茶けてるの。それも半年ぐらいのことね、すぐに日系娘と同じ顔になるわ、わたしなんかアメリカ生れの三世と間違えられちゃう」

わたしは留学生くずれよ、とシイは真顔でいった。

「あの店であんたを見たとき、びっくりしたわ、十年前のわたしが座っていると思ったのよ。あの店でよくあんなふうに座りこんでひとを待ったわ、あんたみたいに亭主を待ったわけじゃないわ、いろんなひとを待ったわ、あそのマスターは、いつのまにかわたしの証人みたいになったわね」

シイはその日、紺緋の着物に朱色の帯を、細い胸に巻きつけて、由子たちのテーブル係りになったのだった。

「パートタイマーなのよ、お金のないときいつでも働かせてくれるわ。ああいう店は、日本からやって来た連中の救済事業をやってるようなものね。もっとも内情はいろいろで、あんたみたいな、おとなしい奥さんには縁のないことばかりね」

シイが由子にそんなはなしをしたのは、それから何日も経ってからであった。日本料理店での彼女は、実に無愛想だった。由子が彼女に一瞥された険しい視線をいつまでも払い落せないでいたのは、そのせいだったかもしれない。

二度目に出くわしたのは、ダウン・タウンのデパートだった。由子が気づいたとき、シイは前と同じジーンズにブーツの乗馬スタイルで、デパート正面の嵌め殺しの大ガラスに寄りかかって、由子のほうを真直ぐ見ていたのである。

大ガラスに寄りかかっているいかにもぼんやりしたようすの東洋の女が、料理店のときの彼女と同一人物であることに、由子はすぐには気がつかないでいた。彼女は一枚ガラスの扉で隔った店内をぶらついていたが、とくに買物物はなかった。高志の勤務地へやって来て、郊外の住宅地に到着くまでのホテル住いが、予定より二、三日長びいていた。高志が、ニューヨーク出張からもどるまでのホテルでのひとり暮らしは、所在なかった。暇にまかせて彼女は、シアトル中心街を歩きまわった。

街は、さほど長くない急な坂が縦横に交叉しており、湿っぽい空気は、低く垂れこめた空から水滴の幕を張り巡らされたように冷たかった。空には、かもめが忙しげに飛びかい、その群は、曇天に不思議な調和を見せていた。

由子の見たこの街は、小柄な年老いた中国人が、まるでこわれものの躰を運んでもいるよう

に、靴音を忍ばせてどこからともなく現われて、どこへともなく消えて行くアメリカ風景だった。それは、由子が思わず足をとめて振り返らずにはいられない、音を消失したこの国の部分ともいえた。

中国人と思われる老人のなかに、日本人の一世もいるにちがいはなかった。彼らはことさらにちいさく痩せ細って、やさしい眼差しをしており、そして上品だった。白人や黒人の群衆に紛れこみながら、彼らの密やかな歩行にぶつかると、由子にはかならず立ちどまってその背後を振り返った。そして、彼らの通り過ぎたあとには、建ち並ぶ新旧のビルディングが、山脈のようにそそり立っているのに気づくのだった。

シイは、デパートでの出会いについて、由子が納得のゆかないようなことをいった。

「あんた、わたしを遠くから見てたでしょう。外が寒かったから、わたしはあそこに立っていただけなのよ。まるでバスを待ってる黒人女みたいに、わたしの顔が解放されてぼんやりしているように見えたかもしれないけど、あのときのわたしは、むこうから歩いて来るそつ気ない顔をした日本の女を見ていたのよ。ええ、あんたのことよ。ガラス越しだったから、すぐには気がつかなかったけど。わたしはあんたが思ったように、ぼんやり寄りかかってたわけじゃないのよ、でも、あそこはいい場所だわ、B・マルシェの入口は、わたしの知ってるシアトルのなかでも、いちばんいい場所だわ、どうしてかっていえば、わたしのほかはだれも立ちどまらないからよ。みんな出たり入ったりするだけなの、それもごくまばらなひとたちね。東京のデパートを思いだすと夢じゃないかって気がするわ、そうでしょう、店の中で大喧嘩か花火大会でもやってるのかと思うわ。B・マルシェはなにもやってないわ。あそこを通り抜ける女もおとこも絶対にわたしを見ない。でもあんたはずっとむこうから、わたしに真直ぐ近づいて来たわね」

由子が、シイの視線を認めたのは、扉を開いたときだった。その重い扉は自動式ではないので、

由子は、両手で手前に引きながら、瞬間、降って湧いたような空気扉について、思いめぐらしていたのだった。空気と風の生ぬるい遮断層をどこでかいくぐった記憶が、音楽のように由子を占領していた。中心部にすこしでも立ちどまると、自身の躰が透明な物体かアルミニウムの円筒形になったような気分になる。そんな連想が、突如甘美なものになるのは、由子に音楽が舞い降りるときだった。彼女は、その不意打ちに満足してあたりをほとんど見ずにそこを通過した。

そして、シイがいたのは、その場所であった。彼女は、茶色のブーツの片方をもう片方からませるようにして立っていた。由子は直面した彼女に目礼した。シイの視線に躓いたとしかいえない出会いであった。

高志とあの店で食事をした翌日から、由子はひとりだった。ひとりになって歩きまわりながら、由子は毎分毎秒あらゆるものを見ていたのである。東洋人のちいさく老いこんだ姿を見た。そして繁華街の交叉点で、犬を連れた白人女に声をかけられた。わたしはチャイニーズではありませんし、あなたが探しているサイモンというひともしりません。白人女にそう応えてから、横断歩道を渡り切ると、対岸にハンディキャップ優先をうたったポスターにぶつかる。そのデザインの美しさに眼の醒めるような衝撃をうける。春のかけらも見あたらないのに、スポーツシャツの女が行く。まだクロッカスは咲いていない。住宅街の庭さきに、点てんと芽ぶいているのが、クロッカスだということは一目でわかる。毛皮を深ぶかと着こんだ老婆が、流し眼を寄こす。ポスターの美しさは、たぶん曇り空のせいだろう。光を閉籠めた雲が、湖水や森林から冬のなごりを奪うまいとして、どこまでも追いつがって来る。その空の下で、賑やかに彩色をほどこされたポスターは、ハンディキャップ児の幸福な横顔をいくつも重ねている。大声でなごとかわめきながら、のっぴの黒人おとこがやって来る。楓の舗道で足が竦みそうになる。大急ぎで脇に躰を寄せ、彼が通り過ぎるのを待つ。おとこの躰は針金のように細く、アンテナコードのように黒くて、